

1 背景とねらい

かけはしは岩手県のオリジナル水稻品種として普及を図ってきたが、本格的作付に入った本年、各地でいもち病が多発した。かけはしのいもち病防除については既に平成6年度指導上の参考事項等で示してきたが、周知徹底を図るため、現地の事例等から多発要因を析出するとともに試験例から得られた若干の知見を加え、防除対策を示して指導上の参考とする。

2 技術の内容

(1) 本年のいもち病多発要因

ア 気象要因

(ア) 5月下旬～7月にかけての低温日照不足の影響で、稲体が軟弱気味となり、窒素濃度も高めに推移していもち病に対する抵抗力が低下していた。7月上中旬以降感染に好適な条件が繰り返して出現し、穂いもちの重要な伝染源となる上位葉の発病を増加させた。

(イ) かけはしの出穂期にあたる8月上旬は、連日降雨が続き、籾いもち、枝梗いもちが発生し、さらに8月下旬にも降雨が続いたため、これらが伝染源となり穂いもちの被害が拡大した。

イ 多発事例にみる施肥・防除の要因(表1)

(ア) 施肥に関する要因

多発事例の半数が、施肥基準をこえた施肥をしており、多肥栽培が発病を助長している。

(イ) 防除に関する要因

① 葉いもち防除の不十分な事例が全体の8割を占めている。葉いもち対象の予防粒剤を施用した8例中、適期に施用した事例は3例のみである。茎葉散布では適期防除の事例は無い。

② 穂いもち防除が不十分な事例は全体の6割弱である。本年のような、出穂期に降雨が連続する気象条件では防除を徹底しても発病を抑制できなかった場合が多い。

③ 本年は、育苗期の発病、感染による本田への持ち込みや、取り置き苗からの2次感染による早期発生が全県で例年より多かった。

かけはしでも、7月上旬以前から発病した早期発生圃場がみられた。なお予防粒剤を適期に施用したうちの2例で防除効果が充分発揮されなかったが、この圃場でも早期発生があったと推定された。

(2) 今後の防除対策

ア 有機物施用、窒素肥料とも過剰な施用は窒素過多となり発病を助長するので、各地域ごとに定められた施肥基準を厳守する。

イ 取り置き苗の早期除去に努める。また育苗期での発病、感染を防止するために以下の対策を行う。

(ア) 健全種子を使用し、種子消毒を徹底する。

(イ) ハウス内や周辺に感染源となるもみがらやわらを置かない。

(ウ) 適期移植を励行し、育苗期間を長引かせない。

(エ) 育苗期の茎葉散布を行う等の対策を講じる。

ウ 薬剤防除は病害虫防除基準に防除体系を示してあるので参照のこと。

(7) かけはしでは、上位葉の展開が例年梅雨期の終盤になることが予想され、葉いもちの多発が穂いもちの多発につながる可能性が高い。よって、葉いもち防除を徹底して行う。

(イ) かけはしは葉いもち抵抗性がやや弱で、病勢進展のスピードが早いため、防除が遅れる場合が多い。そのため葉いもちの防除は予防粒剤の施用を重点とする。予防粒剤の施用時期は6月20～25日とする。

(ウ) 茎葉散布で葉いもち防除を行う場合は、予察情報に基づき時期を失しないように注意する。また予防粒剤を施用した場合も、必要に応じて追加防除を行い、葉いもち防除を徹底する。

(エ) 穂いもち防除は必ず実施する。葉いもちが発生した場合や、周囲の水田で発病がみられる場合は粒剤体系、茎葉防除体系とも穂揃期1週間後の追加防除を行う。

3 指導上の留意事項

(1) 複数の品種を栽培している地域で、茎葉防除を一斉に行う場合、散布時期の決定に当たっては品種の出穂期の違いに配慮する。かけはしは、たかねみのり、あきたこまちに比べ、出穂期が早いので一斉防除が散布適期を失しないように注意する。

4 試験成績の概要

表1 かけはしいもち多発事例における多発要因（平成7年、調査事例数：22）

多発要因		事例数	比率	備考
施肥	内訳	11	50%	施肥基準を越える多肥栽培。 防除圧不足含む
	化学肥料過多	8	36.4%	
	堆肥過多	5	22.7%	化肥との重複 ²
防除	内訳	21	95.5%	防除経過不明 ¹
	葉いもち			
	適期防除と思われたが多発	3	13.6%	本田持ち込み等による早期発生があったと思われ、予防粒剤の効果十分発揮されなかった。
	防除適期を逃すか防除不十分	18	81.8%	
穂いもち	内訳	20	90.9%	防除経過不明 ¹
	適期防除と思われたが多発	9	40.9%	
	適期防除を逃すか防除不十分	11	50.0%	